



2011年度

FD学生の声 コンクール作品集

第4回となった今年度のテーマは 「私語のない授業にするには？」

「私語のない授業にするには、どうしたらよいか？」

学生自ら、自分の受けたい授業作りに知恵を絞りました。

自由な発想で、アイデアをいっぱいふりかけて、

教員と学生がともにハッピーになれる「私語のない理想の授業」を思い描きます。

教員一同を刺激した応募作品をご覧ください。

新 入生の皆さん、毎年、後期には、授業改善のための作品の募集受付が始まります。教員、学生ともにハッピーになるよりよい授業を創るための提案、ご応募お待ちしております。毎年お題は変わりますが、例年7月頃に掲示される予定です。五七五の17文字で表彰状と賞金がもらえるのは、FD学生の声だけです。最終優秀賞は、法政大学総長から直々に表彰状をもらうことができます。来年発行されるこの学習支援ハンドブックに掲載されます。履歴書に書けば、就職時にご利益があるかもしれませんよ!?

FDとは Faculty Developmentの略

法政大学教育開発支援機構FD推進センターでは、FDを「自由と進歩」の建学の精神に基づく教育理念と教育目標を達成するためになされる、教育および学びの質の向上を目的とした教員・職員・学生による組織的・継続的な取り組み」と定義しています。

このFD活動に学生の皆さんの声を活かすため、センターでは2008年度から「FD学生の声コンクール」を開催しています。

※受賞者が氏名等非公開を希望している場合、氏名等を記載していません。



法学部 政治学科 2年 本間 達也

「しゃべりたくなる授業!？」

私たちは小学生から大学生までのおよそ10年以上にもわたって私語の問題と隣り合わせでした。授業中の私語は、放置されるか排除されるかのどちらかの措置が取られるのが一般的である。私語は時に他の学生の授業の妨げとなる為、無論その状態を放置するという選択肢はあるべきではないが、教授の権威による教室からの排除を繰り返しつつも、永遠にこの問題は解決しないのではないだろうか。そこで、学生を教室からつまみ出すのではなく、学生が自らの疑問や意見を思わずしゃべりたくなってしまような授業を作り上げるのはどうだろうか。私語が多い授業は大教室の授業、つまり、教授と学生との距離がある授業で多発する。要するに、この距離感をうめることで、私語ではない、授業をよりよくするための対話が生まれるのである。そのために私は以下2点の方法を提示する。

1点目は、授業の目標が共有されている授業。前期と後期の初回の授業で、シラバスに書いてあるような「授業の目的」をしっかりと伝える。言うだけでなく、しっかりと伝えることが大事である。そして、普段の授業では、授業のはじめに5分程度のオリエンテーションを設け、今日の目標、ここまではしっかりと理解してほしい内容を学生側に伝える。それを黒板の隅に書き、授業中に目的を意識させる。これを行うことによって、学生自身がどこまで理解できていられるのか、また授業をうけるにあたっての計画も立てやすい。

2点目は、双方向性のある授業。教室が広くなればなるほど教授と学生の距離ができてしまい、自然発生的に私語が生まれてしまうのだ。この距離をなくすために、双方向性のある授業を展開したい。双方向性のある授業とは、

1. 学生が疑問点や意見を言える
2. そこにタイムラグが生じないこと
3. 授業に参加しているすべての者に共有されること

以上の3点が行われている授業であると考えます。そこで、これらの条件を満たすツールとして、Twitterの導入を提案したい。大型スクリーンにTwitter表示することによって、授業に参加しているすべての者にリアルタイムで他の学生が考えていることや疑問点が可視化される。また教授もその疑問点を即座に吸い上げることができ、学生の理解度を確認しながら授業を進行できる。さらに、リアクションペーパーの回収による次の授業までの1週間のタイムラグが生じず、興味、関心が刺激されているその瞬間に他の学生の意見に触れ、また新たな興味、関心が芽生える可能性も増える。加えて、授業後に履歴を携帯片手に履歴を見ることによって、いつでもどこでも考える種を得ることができる。

以上提案した「授業の目標が共有されている授業」と「双方向性のある授業」の2点を実践することによって、学生と教授の距離が縮まり、私語ではなく、授業に有効的な対話、「しゃべりたくなる授業」が展開され、自然と私語は無くなっていき、よりよい授業が行えるのではないのでしょうか。

[審査講評]

私語と授業は、隣り合わせ、タイトルである「しゃべりたくなる授業」が示すように授業をよりよくするための対話を生むにはという観点で、3つの提案がされています。ICT技術活用の一例としてTwitterなど、タイムリーで前向きな提案は、目からウロコの作品でした。



国際文化学部 国際文化学科 4年 奥 悠紀子

「授業中の私語と掛けまして、 合唱コンクールで皆が目指すものと解く。 その心は、どちらもきんしよー (禁止よ、金賞)」

まず、なぜ多くの学生は授業中に私語を発してしまうのだろうか。授業に興味がない持てない、友達とのお喋りのほうが楽しい、大勢が喋っていれば自分が喋っていても変わりはない。大体これらが挙げられると思う。多くの学生が少なからず、一度は考えたことだと思う。私自身は、このような散文を書こうとしている人間ではあるが、実際に私語を発したことはある。では自分は何故私語を発したのか。自分の行動とそれに伴った意識を振り返ると同時に、反省し、自分の考えが少なからず大学の役に立てれば良いと思う。

まず、突拍子もないことを書くようだが、そもそも私語って悪いことなのだろうか。確かに授業を聞きたい学生も、授業を展開する先生も、うるさくて、気が散る私語にはうんざりする。しかし、私語を発する学生はわざわざ周りに迷惑を掛けてやろう、とは恐らく思っていない。それよりも、会話をしている人の心理の根底には「発信欲」というものがあり、それによって会話が繰り返される、と私は考える。そして、それに伴う声が雑音と化して、結果的に周りがうるさいと思うのである。

ならば、せつかくの発信欲を有効活用したい。友達との会話の内容がその日の天気であろうと、バイトの愚痴であろうと、恋愛話であろうと、それぞれ発信欲があるのだから。授業に関してだって、発信欲はなきにしもあらず…のはず。ミニレポート、出席カード、授業支援システム上の掲示板、

などアウトプットできるツールは用意されている。しかし、学生の身だと、どうしても背伸びしたり、正直に書けなかったりすることもある。言葉にできない想いや、もやもやと漠然とした考えを持つこともある。そうすると、書いてみてもただただ苦しくなり、内容がなかなかまとまらない。もっと気軽に学生が発信できる方法を考えたい。

「先生と会話。」意外と簡単な話である。会話の相手を先生に変えればいいだけの話だ。難しく考えなくて良い。楽しく、漫才なんかやる気持ちで。まずは先生に「ツッコミ」を入れてみる。「先生、そこ囃んだらアカンやろ。」と簡単なことから始めてみる。一番ベーシックな「なんでやねん」なんて良いツッコミである。「先生、そこ、なんでやねん。おかしいやろ。」それはもう探究心が芽生え始めた証ではないだろうか。言うまでもないが、これらは心の中でツッコむべきである。ツッコミ上手ならフフッと笑ってしまうかもしれない。笑ったらいい。笑ったら、頭に入りやすい。授業は見たところ、先生が作っているものようだが、実は生徒が変形させることができる。自分なりのオリジナリティ溢れる授業にしていくと、きっとこんな謎かけが浮かんでくるのではないだろうか。

法政大学と掛けまして、
運動会の開会式と解く。

その心は、どちらも良いせんせい（先生、宣誓）に出会えます。
おくちです。

[審査講評]

私語のない授業、先生の立場、学生の立場、それぞれから考え、どのようにしていけばよいのかを提案しています。ツッコミを上手に利用した先生との会話、言葉のキャッチボールが生み出すオリジナリティ溢れる授業、先生だけでなく、学生も授業に参加し、楽しみながら授業を創っていく、理想の授業ではないでしょうか。



国際文化学部 国際文化学科 3年 安井 和美

私語の時間
授業料にして
何千円?

ヒマならば
せめて静かに
寝てください

先生の
知識を盗む
90分
チャンス逃すな
自分の物にしろ

[審査講評]

皆さんは、授業料のことを考えて授業を受けているでしょうか？ 授業料を1科目あたりに換算してみると結構な額になります。私語をしている場合ではない、授業料に見合う知識をしっかりと学ぼうとする気迫が感じられる作品でした。



文学部 日本文学科 4年 長野 桃子

「信頼の授業」

「私語のない授業にするには？」

このテーマに、私はもうひとつ付け加えたい言葉があります。

「私語のない、楽しい授業にするには？」

私は現在大学四年生となり、さまざまな授業を受けてきました。それらの授業を振り返ってみて、もっとも授業らしく、かつためになったなあと感じているものはやはり「楽しかったなあ」と今も思える授業です。

学生は、私語がしくて学校に来ているわけではありません。授業に興味をもてなくなると、関係のない話をしたくなってしまうのです。関係のない話は学生たちの「つまらない」という気持ちを満たし、どんどんそちらに神経が集中していきます。そうして授業の中に私語がはびこり、講師は怒ったりどうしようもなくなってしまうのです。

だが、「私語のない授業はいい授業」とは限らないと思います。講師がいつもびりびりして、少し相談しただけでも怒られてしまう授業は、その時はたとえ静かであっても、私の頭の中にはもうその内容は残っていません。授業でなくとも、90分の沈黙というのは人間にとってもけっこうなストレスになりえるし、それが何度も続くとなるとなおさらです。

では、一体何が私語を食い止め、かつためになる授業にできるのか。

それは、私語が「授業に関係のないもの」になるのではなく、「ひとつの発言」になるようにできればいいのだと考えます。

たとえばこんな授業。

大人数の授業の場合は、アシスタントが2、3人ついて、教室にスタンバイ。関係のない話をしているような学生は、その場で彼らが名簿にチェックするようにします。(このプレッシャーだけでも多少の私語は減るように思いますが、これはあくまでもサポートとします)

そして、授業が進み、講師は答えを教えようと思いますが、その前に学生たちに「わかる人はいますか」と尋ね、極めつけにこう言います。

「いい答えの人は、ポイントアップね！」

学生は考えだします。「いい答え」って、なんだろう？ 私語は相談になり、教室はいろんな答えが交差し、いつしかそれは発言になります。アシスタントがマイクを持って学生たちのもとを訪ね、「いい答え」……正解だったり、柔軟だったり、単純におもしろい発想だったり、そういった答えをまたチェックしていきます。

しばらくはそうしてうるさくなりそうですが、この時友人たちと相談して考えたことは、後々になっても覚えていたりするものです。この「思考」「相談」が実は授業に大切なのだと私は思います。ただ受け身で居続けることは、普段の人間関係の中でも辛くてつまらないものです。それはもちろん、授業にも言えることではないでしょうか。

そして、しばらくしてから講師は言います。

「正解を発表します」

すると、しばらくの間がやがやしていた教室は瞬時に収まります。誰もが、その「いい答え」を聞きたくなるからです。そこで聞く本当の答えは、自分たちで考えたその答えと一緒に照らし合わせることで、また学生の記憶に残るものになるのです。

この時大切なもの。この掛け合いが達成されるために必要なもの。それは「信頼関係」です。講師は学生を信頼し、彼らに自分たちで答えを考える時間をあえて与える。その時間は学生たちの時間。そこを生かすも殺すも、彼ら次第。そこを信頼して、考え、導き、時に柔軟に面白い視点から物事を考えてもらう。

人は信頼されると、自分を信じてくれる人を信頼できるようになります。

学生は楽しみながら言葉を掛け合い、考え、そして答えを求めます。そして最後に講師がその答えを導くとき、ここに「信頼関係」が生まれてくるのではないのでしょうか。

「この人のやり方は面白い」

「自分たちが考えて発言することでポイントもらえるなら頑張ろう」こんな考えがあってもいいと思います。それが知識につながっていくのであれば、講師の目的は達せられるのです。

このやり方はあくまでも一例です。毎回面白いアンケートを実施するとか、講師が教壇に立たずにうろうろと回って話を聞いてもいいでしょう。学生に興味を持たせる授業をする講師を、学生は「この人の授業はちゃんと聞こう」と信用します。それが結果的に、「関係のない話がない授業」につながっていくはずですよ。

私語のない授業は確かに集中できます。でも、それは一時のものになる場合が多いように思います。その瞬間だけ必要な知識を埋め込むには重要なことです。しかし、そこに講師と学生が掛け合って本当の答えを考えたり、試験には関係なくてもぜひ知ってほしい知識などを楽しく教えてもらえれば、そこに生まれた「信頼関係」はきっとずっと頭のどこかに残っていくはずですよ。

私はほとんどの人が最後の学生生活になるであろうこの大学でこそ、「私語のない授業」というよりも「発言の多い楽しい、ためになる授業」がひとつでも多くあってほしいと、そう願っています。

[審査講評]

私語のない楽しい授業にするには?ということ、4年間、法政大学で授業を受けてきた体験をベースに書かれており、説得力のある作品でした。受ける学生も、講義をする教員も両方が協力しハッピーな気分になれる授業、そんな授業をぜひ増やす努力をしていきたいですね。



経営学部 市場経営学科 2年 吉原 潤一

「私の体験した、私語のない授業にする“ワザ”」

みなさんは、私語の多い授業についてどう思いますか？ ガヤガヤとうるさい授業ってやっぱり集中できなくて困りますよね。

でも、授業を受けているときに何気なく、「この授業って、なんで私語が多いのだろう」って考えたことありますか？ つまり、どうしてこの授業は友達とおしゃべりしやすい環境なのだろうか、ということです。

同じ学生が同じメンバーで授業を受けていたとしても、授業によっておしゃべりするかどうかかなりの差がでますよね。それは、やはり授業の進め方や決まりなど教師の力量が関わっていることを表していると思います。

そこで私がある授業で体験した、私語をなくすいくつかの“ワザ”を紹介したいと思います。

ひとつめの“ワザ”は、リアクションペーパーを書かせることです。これはいくつかの授業で行われていましたが、効果あります。

授業で取り扱った論点またはビデオなどの感じたこと、思ったことを教授が指定して書かせます。そして、もうひとつ授業をとおして感じたこと思ったことを自由に書く欄も用意します。そうすると、普段発言できない人や授業では、より教授と学生が相互につながることができます。おしゃべりしないで書くことに意識がいく人も自然に増えてくるとは思いません。

次に紹介する“ワザ”は珍しいタイプですが、私語をしている人に対して直接先生が話しかけることです。

私が受講していたある授業でのこと。その先生は学生に語りかけるように講義する先生であったが、そのときは、話すのに間を置いたと思ったら、



理工学部 創生科学科 1年 福島 広大

私語ですら 議題へ変わる その講義

奥深き故 私語も静まる

[審査講評]

私語から授業の議題へ、先生の絶妙な話術がみんなをうまく引き込む、さすがプロの仕事ということを感じさせる授業、ぜひ受けてみたいですね。

「教室の右ブロックのちょうど真ん中あたりに座ってる2人！楽しそうになに話してるんだい？」
と言ったのです。寝耳に水のように話しかけられた2人はびっくり。
「先生に言えないような話はしないようにな」
と優しく先生はチクリ。
2人は押し黙り、以来、この授業では堂々と私語をしなくなりました。

でも、その先生は別のときにこうも言っていました。
「たいていおしゃべりしたい人とかあてられたくない人だね。だからさ、誰かに意見求めたいときは、後ろの方にいる人に聞くんだ。そうしたら、翌週、後ろの方のいたやつあてられたくないから、真ん中あたりに座るようになっておしゃべりもしなくなったんだ」って。
なんかすごい理論だと思いませんか？ 普通前の方に座ってるやる気のある人にあてる先生が多い中、まさに逆転の発想。

しかも、この先生、前期の最後の授業に
「思えば5月、震災の影響で残念ながら授業が短くなってしまいました。……」
という切り口から始まって
「できることなら、もっとみんなと一緒に授業したかった。前期11回あつというまだったなっていう思いです。みんなと一緒に授業できて本当に楽しかった。ありがとう！またいつかどこかで！」
って話したのです。ほんの2、3分のことでした。

もちろん、90人いた教室、誰一人が私語をすることなく――。

授業をしていて楽しいっていう先生の熱い思いはやっぱり学生にひしと伝わるものなのです。これが一番の“ワザ”なのでしょう！

なんだか後半は私が受けていた授業のある先生の話のようになってしまいましたね。
でも、私が述べた中で一番伝えたかったことは、先生が学生と一体となって授業をつくりあげること。そして、人数がどうであれ、受講している学生全員を巻きこむような授業づくり。これらが、「私語のない授業」にするのに大切なことだと考えます。
もちろん学生が私語をしなくて集中して授業を受けることも大事だということを、改めて述べて最後の提案といたします。これを読んでくれた教員、学生の一人にでもこの思いが伝わればと思います。

[審査講評]

受けてきた授業体験を元にした私語をなくすワザの紹介をいくつか紹介して頂きました。ちなみに、リアクションペーパーを使ったワザは、法政大学教員の授業改善のための書、「法政大学FDハンドブック」[授業記録]を使った学生とのコミュニケーション：新田誠吾先生（経済学部）にも記載されています。



「拍手をしたくなる授業」

誰しも必ずうるさくてかなわない授業を受けたことがあるだろう。授業をまじめに聞きたいのにうるさくて聞けない、もしくはみんながしゃべっているのだからいいや。と自分もその仲間に加わってしまった記憶もあるだろう。

そんなとき先生たちがいうセリフは決まっていつもこうだ。

「おしゃべりがしたいならどうぞ、外に出てもらってかまわないので。授業を聞きたい人に迷惑です、寝ていてもいいので静かにしてください。テストのとき困るかもしれませんが。」

数秒待つ、沈黙、そして授業が再開される。

・・・がぼつぼつと小さなおしゃべりが聞こえ始め、やがて教室全体ががやがやして。結局はいつも同じことの繰り返し。

私たちは心の奥底で思っている。

「みんなしゃべっているから大丈夫、そんなには怒られない。」

先生たちも思っている。

「どうせ無駄だ、試験で困ればいい、聞きたい人だけ聞けばいい。」

でもあるとき出会った授業で私は面白い体験をした。その授業は大教室で行われ、その日もだんだんと教室ががやがやし始めていた。すると先生が叫んだ。

「こんなにうるさくちゃ集中できないヨ！ ボクの授業をみんなに聞いてほしいんダ！ 絶対みんなの為になるヨ！」

少し呆気にとられた。先生は自分の授業が面白いことにすごく自信を持っているのが伝わってきたし、だからこそ一部の聞きたい人だけでなく全員に聞いてほしいのだと思った。

いつになく静かに授業が進んでいく。すると先生が言った。

「いいネ！こんなだとボクの調子もいいヨ!!」

みんなが笑った、最後までテンポよく授業はすすんでいった。笑いと拍手で授業は幕を閉じた。

そう、先生の授業はいつもみんなの拍手で終わる。みんなの意識が先生に集中していた。

私は思う。私語のない授業に必要なのは私たちの集中力だ。そしてそれには授業の内容だけでなく先生たちにも魅力的であってほしい。

自分たちの授業がいかに面白いのかを聞きたい人が聞けばいいと受け身ではなく聞いてくれ！と全身で攻めていく授業はどうだろう。そして私たちも先生への敬意と集中をもって拍手で始まり、拍手で終わる授業、そんな授業ならば私語も減ってくるのではなかろうか。

【審査講評】

実体験をもとに書かれた作品。拍手で終わる先生の熱意が伝わる授業、受け身ではなく全身で攻めて受ける講義。ぜひ受けてみたいですね。



佳作

国際文化学部 国際文化学科 4年 馬場 麻子

「あなたは今日、何を学びましたか？」



[審査講評]

なんとなく、イメージが頭の中に残る味のある授業風景ですね。ヘッドホンをして授業をすれば、私語はできませんね。



佳作

「やる気=私語のない授業」

「この授業は過去最高にうるさい。やる気をなくしてるんだよね」

私が受けてきた授業でそう発言した教員がいた。一方の学生は、友人とのおしゃべりに夢中となっていた。ここまでではないが、少なからず私語のある授業は多いと感じる。しかし、私語のない授業も一方にはある。タイトルとなっている式は、私が4年間受けてきた私語のない授業に共通していたことである。そこで、私語のない授業と言って思い出す2つ授業を例にとりこの式について解説をしていきたい。

〈授業A〉

教員が研究されている内容を話す授業である。やり方としては毎回プリントを配布し、板書を交えて授業を進めていた。ほとんど私語が生じることがなかったため、私は、快適に参加することができたが、年に一回だけ私語が生じた。そこで、なぜほとんど私語が生じなかったのか。また1回だけ私語が生じてしまったのか。その原因を以下に挙げてみた。

〈私語が生じなかった原因〉

- ① 厳しいと言われる教員の授業であるため、やる気の高い学生が多かったから。
- ② 内容がオリジナルであるため、面白いから。
- ③ 少し難しい内容であったため、真剣に聞いていないと理解できないから。

〈私語が生じた原因〉

- ① 一方的に行われることが多く、対話、議論などの双方向性がなかったから。

〈分析〉

この授業で私語が生じなかった最大の理由は、やる気の高い学生にあったと考える。難しい授

業内容であるにもかかわらず学生が履修していたのは、学びたい意欲が高いためであり、その姿勢が教員の話真剣に聞き、メモを取るという行動に表れているのではないだろうか。この学生のやる気の高さが、私語のない授業をつくりあげていたと考えられる。

しかし、一部の学生は私語をしていた。この学生は時間割や単位修得の都合上、授業を履修したため興味関心が無く私語をしてしまったのかもしれないが、一方的に行われてしまっている授業にも原因があるのではないだろうか。つまり、教員は話すことに夢中になってしまい、学生の集中力が切れてしまったことが原因である。もし、やりとりがあれば、学生の気を引き、興味を抱くきっかけをつくることのできるため、授業に集中してもらえたのではないだろうか。

〈授業B〉

何名かの講師によって行われている授業であるが、その中のひとりである外部講師の授業が、私語が生じないことで印象的であった。やり方としては、毎回数枚の資料を配布し、適宜、映像を用いるといった方法であった。また、自分らしさを表現するために文章を書き、それを他の受講生に渡してコメントを書いてもらったり、先輩方のパネルディスカッションを聞いたり、他の受講生に質問をするといったことを授業で行っていた。

なぜこの授業は私語が生じなかったのか。以下に原因を挙げてみた。

〈私語が生じなかった原因〉

- ①身近なエピソードを取り入れており、面白いストーリーの展開があるから。
- ②教員が一方的に話すのではなく、学生同士のやりとりなどの双方向性があるから。

〈原因の分析〉

双方向がある授業内容であるため飽きる事無く参加できたことが、私語が生じなかった原因のひとつかもしれないが、もっとも私語を生じなくさせたのが、講師の話すエピソードである。「去年、就職活動をしていたAさんは…」と話始め興味を引き付ける。気づくと教室中のほとんどの学生が講師の方に顔を向けて、真剣なまなざしで聞くという状態になっていた。そのエピソードも身近なものであり、面白いストーリーとなっていた。そのため、学生は講師の話に夢中となって聞き入っ

ていたのではないだろうか。

〈まとめ〉

以上の分析から、私語のない授業にするヒントがいくつか出てきたが、その中で最も大切なのは〈授業A〉で述べた「やる気」ではないだろうか。やる気があるから、学生側は真剣に聞き、メモを取る。一方、教員側は、〈授業B〉の講師みたいに学生が引かれるようなエピソードを話したり、授業に双方向性を設けるなどの工夫を加えるのではないだろうか。このようにやる気があるのであれば、学生と教員は授業に真剣に向き合うと考えられる。

そしてやる気から、授業に対する面白さが生じる。たとえば、学生は授業に関連する文献を読んだり、教員に尋ねることで授業に対する関心がより深まり、面白さを感じる。一方、教員は授業に工夫を加えたり、他の教員と意見交換を行う中で、たとえば、教育や指導に関する事、学生とのやりとりなどで新しい発見があり、面白さを感じるのではないだろうか。そうすれば、学生は興味関心を持って授業に参加できるため、私語をしようという気持ちにならないし、教員の側は注意をせずに、快適に授業を行うことができるのではないだろうか。このやる気が私語のない授業にするために必要なことであると考えた。

〔審査講評〕

実際に受けた授業をもとに、私語の観点から、2つの授業の分析を行っています。学生の「やる気」をいかに引き出すか、教員はどのように見られているのか?とても参考になる作品でした。



法学部 政治学科 2年 伊藤 瑞木

1. 先生の熱く語る声

生徒の高鳴る胸の音
本をめくる音
ノートを走るペンの音
かき消してはいけないんだ
それは未来へ歩いていく
大切な足音だから

2. 生徒は先生に聞きたい

先生も生徒に聞きたい
一緒に学んで一緒に成長する
お互いに新しい発見がある
みんな夢中だ
気がつけば私語が消えていた
一期一会
みんなで一緒に歩いていく

[審査講評]

先生の熱い思い、学生の熱い思い、それぞれが伝わってきます。私語を忘れるような授業、こんな授業を受けてみたいですね。



社会学部

「私語しちゃダメ」



www.comipo.com

[審査講評]

漫画をうまく描けなくても漫画作成ツールを使えば大丈夫！絵より内容で勝負です。ぜひ、次回も応募してくださいね。



国際文化学部 国際文化学科 3年 長谷川 円香

「私の好きな授業」

今年は3月に大きな地震があり、例年とは違う環境での新学期のスタートとなった。

私の学ぶ市ヶ谷キャンパスは、新学期の始まる時期が1カ月遅れ、大規模な節電対策で、夏場は蒸し暑い教室で授業を受けた。そんな中、いつものように先生からの提案型授業を受けていたが、私からの自発的な意欲はあまりなかったと思う。

そんな中、私はある授業に出会った。

授業内容は、異文化でのコミュニケーションとは何か？をテーマに学生が意見を出し合ったり、お互いの考えを交換し合ったりする。

前期の授業では、3月の出来事もあり、『原発問題についてどう思うか?』『節電対策への取り組み方について』というテーマについて意見交換をした。しかし、今現在、節電対策中の環境にいるのに、私はあまり知識がなく、自分から意見を言うことができなかった。後から考えれば意見する内容はたくさんあったはずなのに、その場では発言できなかった。その時、社会で問題になっているトピックに対して、積極的に発言できなかったことが恥ずかしかった。友人とおしゃべりをすれば自分の考えは素直に言えるのに、授業になると発言できなくなるのは不思議だ。その時、私は受身で情報を得ているだけではよくないと思い、次回からはもっと自分から発言しようと思った。だから、先生や周りの学生がどんな意見を求めているのか、それぞれのテーマでどんな知識が必要なのかを考えるようになり、予習をし、新しい情報が欲しくて他の授業も以前よ

り一生懸命に受けるようになった。

若者のコミュニケーション能力が問われている現代で、私のように活発に意見できない生徒はたくさんいると思う。逆に、活発に意見できる環境も少ないのではないかと思った。

学びたい、知りたい、参加したいと思わなければ、自発的に授業に参加できない。授業で学び得た情報はフィールドで表現しなければ、習得したことにはならないのではないかと思う。

先生は私のような消極的な生徒に気を使ってくれた。「あなたはどう思いますか?」と、発言の場を提供してくれたので、一生懸命に自分の言葉で考えや経験を伝えようと努力できた。後期になると、学生同士の仲も良くなって、更にスムーズな意見交換ができるようになっていと感じる。また、みんなが積極的に参加している授業は生き生きとしているし、何よりも楽しい。この授業は、一言で言うと、私語が私語にならないクラスだ。

はじめは聞いているだけの授業の方がいいと思っていたが、今では、この授業が一番好きだ。

私語が私語にならないクラス。とは、前提条件として、学生の授業に対する意欲が高いことだと思う。学生の積極的な姿勢をうまく表現できるこの授業は素晴らしいと思う。今後、私以外の学生もこのような授業に出会ってほしい。

[審査講評]

私語が私語にならないクラス、そのような授業はどんな授業か?具体的に自分が受けた授業の体験談を元に構成しています。私も受けてみたい素晴らしい授業ですね。

学生座談会「私語のない授業にするには？」

〈第4回FD学生の声コンクール〉
受賞者の皆さんと2011年度学生
FDスタッフの皆さんに、コンクール
のテーマ「私語のない授業にするに
は？」について話し合っていました。

さまざまな意見が飛び交い、活発
な話し合いがなされました。



学生FDスタッフ

学生FDスタッフは、学
生の目線から大学の教育
や学びの質の向上を目指
し、教職員とともにさまざ
まな活動をしています。

FD推進センターではス
タッフを随時募集していま
す。関心のある方は、ぜ
ひ参加してみましよう。

スタッフ募集に関する 問い合わせ先

FD推進センター

学生FDスタッフ募集係

TEL:03-3264-4268

E-mail:fd-jimu@hosei.

ac.jp

どうして私語をしてしまうんだろう——学習意欲と授業内容のミスマッチ——

- 「期待を膨らませて入学しても、いざ授業に出てみたら、大教室で先生がただ一方的に話しているだけ。内容としてはきっと素晴らしいんだろうけれど、1年生でそんなことわかるわけがない。理解できないまま授業がすぎ、そのうちに友達と授業に関係のないことをしゃべってしまう。」
- 「周りの人たちが私語をしていると最初はムツとするけど、自分もそれにひきずられることがある。」
- 「自分が学びたいことと、授業で学べることが合っていれば、私語はないかもしれないけど。」
- 「でも、1年生のうちは専門の授業があまりとれないから、学びたいことを教えている授業には結局出られなくて、意欲が下がってしまう人もいる。卒業単位を揃えるためには、興味のない授業も履修しないとイケないのが現実だし。」

私語のない授業——先生と学生の「一体感」——

- 「自分の受講した授業では、学生が私語をしていると、先生がその私語の中からキーワードを取り出し、授業内容にからめて、ちょっとした小咄にした。教室は静かになっていくし、私語をしていた人たちはびっくりしてた。」
- 「私語が単なる個人的な私語から、授業テーマのディスカッションへ発展していった授業があって、すごく印象に残っている。」



国際文化学部 国際文化学科 4年 加部 牙香

「匿名希望／22歳／女性」

私語をやめろと言われても、

先生がひとりで私語をしているから…

わたし達も話にまぜて下さい。

【審査講評】

確かに、先生と一緒に話せば、私語も私語ではなくなりますね。わたしも“ではなく”わたし達も”というところが、よりよい授業を創り上げていくポイントでしょうか？

- 「大学の先生って、高校までの先生よりずっと遠い存在で、自分から話をできる距離じゃない。でも、もし対話できる距離まで先生が歩み寄ってくれたら、学生の方も『自分も授業を作ってるメンバーの一員なんだ』という実感がわいて、授業に対する真剣さも変わってくるんじゃないだろうか。」
- 「うん、先生と学生の一体感を感じると気持ちが変わる。たとえ受講生が多くて、自分は『その他大勢』ではなく、『先生に無視されていない存在』だと気づくと、授業に集中せざるをえないから。」

私語をなくすために①—私語に対する秘策？—

- 「実は、『出席をとらない』というのも私語対策になると思う。真面目に授業を聴く気もないのに出席点のためだけに出席する、なんていう人たちが教室にいるのが問題で、意欲のある人だけが出席すればいい。」
- 「やる気のない人を排除していくのは、それはそれでおかしい気がする。でも、出席の取り方はよく考えてほしいと思う。真面目に授業に出ている人とそうでない人を、出席カードを工夫することで区別してくれている先生がいて、そういうところでもちゃんと評価してくれていることがわかると、先生に対する信頼感が増す。」
- 「私語をするかしないかは、その人の学習意欲と関わっていると思うけど、1年間の間に学びたいこともどんどん変わっていくんだから、学生の意欲を高めるために、通年授業ではなく、完全にセメスター制にして、もっと柔軟な形で受講できるようにした方がいいのに、と思うことがある。」



私語をなくすために②—学生の意識向上—

- 「自分は、今の大学のシステムを変えなくていいし、先生も今のままでかまわないと思う。本来、大学は自主性を重んじるころなのだし、そうした意識のない人や学ぶ意欲のない人に、先生がその場その場の対処法をとって、甘やかしてもしょうがない。学生自身が学ぶ気持ちを高めていくことが重要。」
- 「なぜ大学に来たか、何を学びたいかということについて、意識したり確認したりする場が必要じゃないか。そのことによって、学生に自主性も生まれるし、授業に対する疎外感を感じることもなくなる。」
- 「大学生の間はいろいろなことが体験できるけど、その中でもやっぱり授業は大事。授業には、先生たちがこれまで研究してきたことが凝縮されているのに、それを学ぶ絶好の機会を私語で無駄にするのはもったいない。」
- 「学びたければ、授業に積極的に参加する。学びたくなければ、行かない。そういう自由が大学にはある。だからこそ、出席するからには、学生側にも『授業』の一員として責任があるはず。」

学生座談会は1時間半にも及び、熱く活発な意見交換が行われました。「私語」は、『他の人に迷惑な行為』というだけのことでなく、授業をめぐるさまざまな問題や歪みと深く関わっていることが、座談会であらためて浮き彫りにされました。

「私語」は、皆さんにとっても身近な問題です。それを一つの切り口として、皆さんも大学の授業のあり方について考えてみましょう。



座談会に出席してくれた第4回FD学生の声コンクール受賞者と2011年度学生FDスタッフの皆さん